データから見る
幼児教育

幼児期の家庭教育国際調査

社会環境の変化が加速する中、環境に柔軟に適応し、学び続け、課題を解決しようとする「学びに向かう力」の重要性が注目されています。日本、中国、インドネシア、フィンランドで行った国際調査の結果を基に、幼児期における「学びに向かう力」の発達状況や、それを育むために重要となる母親のかかわり、各国の社会・文化の違いなどをご紹介します。

「学びに向かう力」を多様な視点でバランスよく育ててほしい

目白大学 人間学部 子ども学科 准教授
荒牧美佐子先生

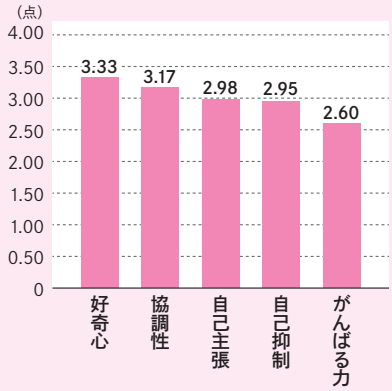
あらまき・みさこ
専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。本調査の監修者の１人。

本調査では「学びに向かう力（非認知的スキル）」を、「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」という５つの要素で捉えています。幼児期からの育成が重要とされ、幼児期を基礎として、その後も伸び続ける力です。「学びに向かう力」の５要素は、相互に影響し合いながら伸びていくと考えられます。例えば、人と協働する際には、自分のことを正しく伝え、相手に合わせて自分の感情をコントロールすることなどが必要になります。人を押しのけてでも自分を貫くことではなく、意に反してまで我慢することでもない。「自己主張」と「自己抑制」とが両輪となり、「協調性」もその中で伸びていきます。このように「学

図1 「学びに向かう力」を構成する5つの要素と項目

好奇心	• 新しいことに好奇心をもてる　• 好きなことに集中して遊べる • 工夫して遊べる • わからないことについて「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる
協調性	• 遊びなどで友だちと協力することができる • 人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができる • 遊ぶとき、「入れて」「一緒に遊ぼう」「貸して」など友だちに声かけができる • 友だちとけんかしても、謝るなどして仲直りができる
自己主張	• 自分が何をしたいかを言える　• ほしいもの、してほしいことを大人に頼める • 困ったことがあったら、まわりの人に助けを求めることができる • 友達からいやなことをされたら、「いや」「やめて」などと言える • 友達と意見が違っても、自分の意見を主張することができる
自己抑制	• 人の話が終わるまで静かに聞ける　• ルールを守りながら遊べる • 遊びなどで順番が回ってくるまで待てる • 夢中になっていることでも、時間がくれば、次のことに移ることができる • 遊びを中断されても、時間をおいて続けられる • 自分がやりたいと思っても、人のいやがることはがまんできる
がんばる力	• 物事をあきらめずに挑戦することができる • どんなことに対しても、自信をもって取り組める • 自分でしたいことがうまくいかないときでも、工夫して達成しようとすることができる • 一度始めたことは最後までやり通せる

図2 「学びに向かう力」５要素の発達状況（日本の6歳児）



※得点の出し方：「好奇心」「協調性」「自己主張」「自己抑制」「がんばる力」の各項目において、「とてもあてはまる」を４点、「まああてはまる」を３点、「どちらともいえない」を２点、「あまりあてはまらない」を１点、「ぜんぜんあてはまらない」を０点として算出し、平均点を出した。
※回答者数３６２人。

■「幼児期の家庭教育国際調査」の調査概要

調査対象： 4歳～6歳（就学前）の子どもをもつ母親

調査項目： 生活習慣・学びに向かう力（非認知的スキル）・文字・数・思考（認知的スキル）／母親の養育態度・行動／メディアとのかかわり／母親の教育観・子育て観／教育・しつけの情報源など。

調査国（地域）／調査時期／調査方法／有効回答数：

- **日本**（首都圏）／2017年3月／インターネット調査／1,086人
- **中国**（北京市・上海市・成都市）／2017年6月／幼児園通しの自記式質問紙調査／2,778人
- **インドネシア**（ジャカルタ市、他近郊4市）／2017年5～7月／調査員の戸別訪問による聞き取り調査／900人
- **フィンランド**（エスポー市、他3市）／2017年6～7月／保育園通しで配信されたインターネット調査／180人

※図表・文中では国名を記載しているが、調査は各国の都市圏で実施しており、調査国全体の平均値を示すものではない。
※各国の小学校入学月の1～3か月前に時期を合わせて調査を行った。
※中国のみ「無答不明」が生じたため、除外して算出した。

引用・転載時のお願い 本調査の結果を引用・転載される際には、調査名称を記載してください。〈例：ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育国際調査」(2018)〉

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。▶ https://berd.benesse.jp/ または ベネッセ　家庭教育国際調査　検索

びに向かう力」は、個々に育てるのではなく、全体をバランスよく伸ばしていくことが大切です。

今回の国際調査では、「学びに向かう力」を子どもの具体的な姿として表し（図1）、同じ聞き方で各国の調査を行いました。注目すべきは、社会文化的背景が異なる4か国の母親の回答が似た傾向を示したことです。図2は日本の結果ですが、他の3か国も同様に、「好奇心」の得点が最も高くて「がんばる力」の得点がやや低い。つまり、自分の意思で苦手なことに取り組む力はまだ十分ではないものの、いろいろなことに興味をもち、好きなことなら一生懸命になれるという姿は共通しているようです。

さらに、4か国とも母親が子どもの気持ちに寄り添い、尊重するようなかかわり（「寄り添い型」の養育態度（図3））をしているといった共通傾向が見られ、寄り添い型のかかわりであるほど、子どもは「新しいことに好奇心をもてる」（「好奇心」の項目）、「物事をあきらめずに、挑戦することができる」（「がんばる力」の項目）の比率が高いことがわかりました（図4）。

とはいえ、保護者のかかわりに“ベスト”があるわけではありません。この結果は、「好奇心」や「がんばる力」を育む上では、子ども自身の意欲を尊重し、自分で考える力を大切にするという、寄り添い型のかかわりが重要であることを示しているのではないでしょうか。保護者も園の先生方も、年齢に応じてできる範囲を広げられるよう、伴走者のように寄り添いながら「学びに向かう力」を子ども自身に育み、自分の意思で動けるように支援していくことが大切だと考えます。

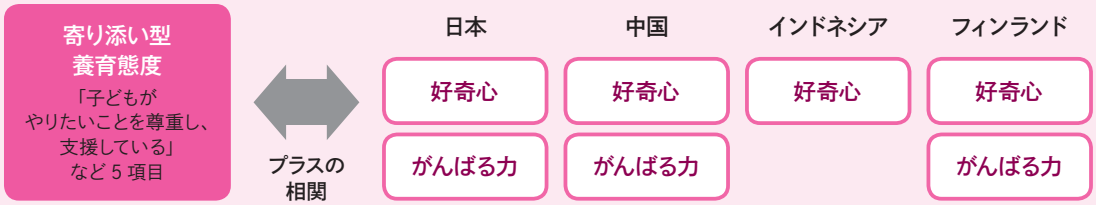
「学びに向かう力」は、園で既に取り組まれているさまざまな活動を通して伸びていきます。その際に、園の先生方には自園の活動がどのような力を育てているかを振り返る視点として、「学びに向かう力」の各項目を活用していただければと思います。振り返りの視点として「10の姿」を活用されている園もあるでしょう。どちらも子どもの成長する姿として最終的には重なるものなので、取り入れやすい方でかまいません。よりよい活動とするための振り返りの視点を多くもち、今育てている力が将来につながることを意識していただきたいと思います。それは、日々の子育てに試行錯誤する保護者への力強い支援にもなるはずです。

図3 母親の養育態度の型と項目

寄り添い型
- 子どもがやりたいことを尊重し、支援している
- どんなことでも、まず子どもの気持ちを受け止めるようにしている
- 子どもに対して否定的ではなく、前向きで積極的な態度をとるように心がけている
- しかるとき、子どもの言い分を聞くようにしている
- 子どもが自分でやろうとしているとき、手を出さずに最後までやらせるようにしている

保護型
- 私が一緒にいてあげないと、子どもは自分のことができないのではないかと心配になる
- 子どもに対して過保護である
- 子どもがしようとしていることすべてにわたってコントロールしようとしてしまう
- 子どものことを、年齢より幼く扱うことが多い
- 子どもを私に頼らせようとしている

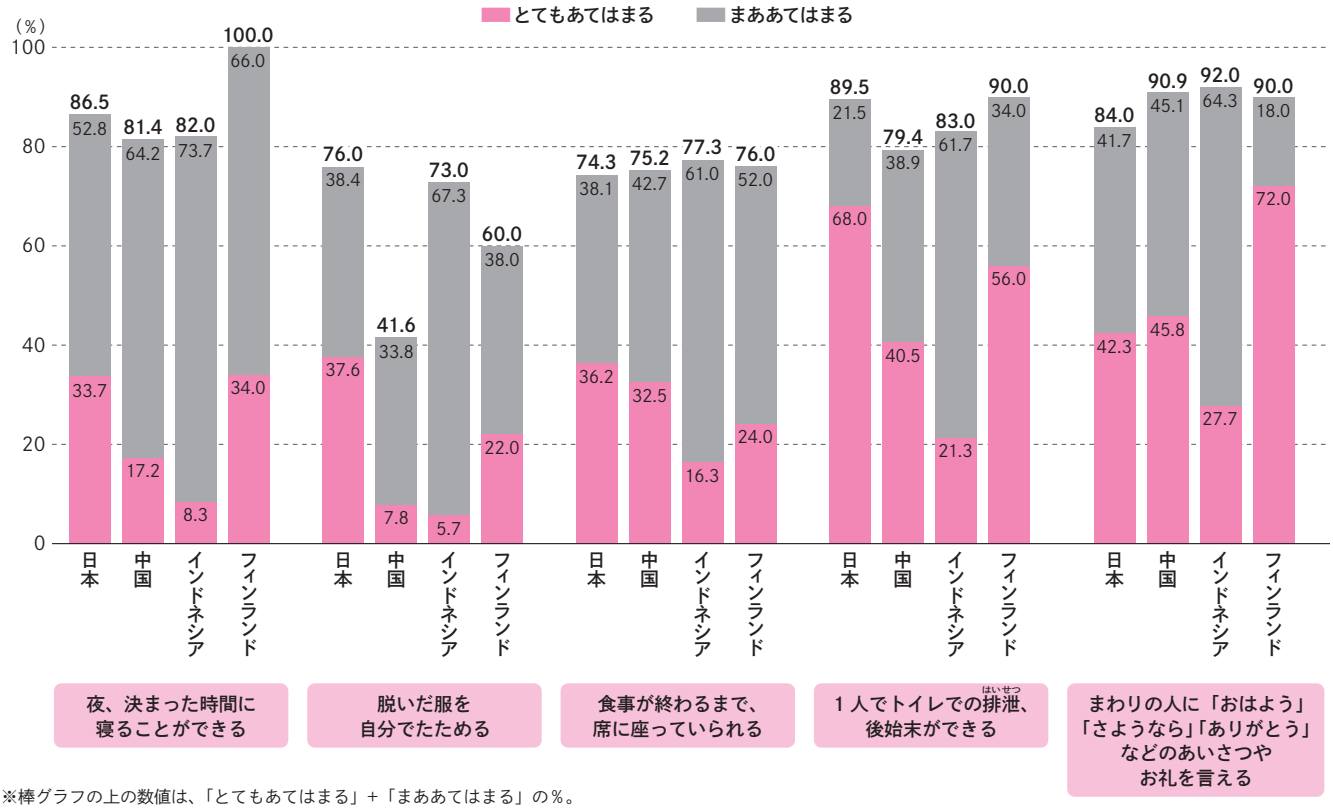
図4 「学びに向かう力」と母親のかかわり



※4～6歳のデータ。二変量相関分析により、中程度（0.2～0.4）のプラスの相関が見られた。

1 子どもの生活習慣（6歳児）

日本の子どもの生活習慣は全体的にバランスよく身についている



※棒グラフの上の数値は、「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％。

「夜決まった時間に寝ることができる」は、フィンランドが100％と４か国の中で最も高いですが、他国も80％以上を示し、全体的に身についていると言える生活習慣です。また、「食事が終わるまで、席に座っていられる」は75％程度、「まわりの人に『おはよう』『さようなら』『ありがとう』などのあいさつやお礼を言える」は85～90％程度と、各国の差はあまり見られません。

一方、「脱いだ服を自分でたためる」は、中国が41.6％という低い結果になり、「１人でトイレでの排泄（はいせつ）、後始末ができる」も、中国がやや低い結果になりました。身につけるべき生活習慣として何を重要視するかという意識の差がありそうです。

日本の子どもは比較的バランスよく、生活習慣が身についています。核家族化が進み、祖父母世代や地域の人々とのかかわりが減りつつある日本では、子育ての多くの部分を家庭と園だけで行うことが主流になっています。このような状況下で、日本の母親は頑張っていると言えるのではないでしょうか。

荒牧先生からメッセージ

子どもの生活習慣づけに関して、家庭と園との間で役割の線引きをすることはなかなか難しいかと思います。生活習慣が十分に身についていない子どもがいた場合、保護者と連携しながらサポートするのが園の役割だと考えましょう。周囲の人へのあいさつなど、園でもできることは積極的に取り組み、家庭と園の両方で子どもを育てるという意識が大切です。

データ解説・本調査の担当

ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室 主任研究員
持田聖子 もちだ・せいこ

妊娠・出産期から乳幼児をもつ家族を対象とした調査・研究を担当。主な調査は、「妊娠出産子育て基本調査」「未妊レポート――子どもを持つことについて」など。生活者としての視点で、人が家族をもち、役割が増えていく中での意識・生活の変容と環境による影響について調査・研究を行っている。

2 家庭にあるものの使用（視聴）頻度（子ども）

各国共通でテレビの頻度が高く
日本では新しい情報機器の頻度が他３か国より低い

	日本	中国	インドネシア	フィンランド
1位	テレビ 93.3%	絵本 66.1%	テレビ 96.3%	テレビ 90.0%
2位	絵本 57.2%	テレビ 57.4%	スマートフォン 63.7%	絵本 77.2%
3位	ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー 51.2%	知育玩具（つみ木、ブロックなど） 47.5%	ワーク（子ども向けの「ワーク」や「学習用ドリル」など） 38.7%	知育玩具（つみ木、ブロックなど） 46.7%
4位	知育玩具（つみ木、ブロックなど） 41.6%	ワーク（子ども向けの「ワーク」や「学習用ドリル」など） 27.4%	ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー 38.4%	タブレット端末（iPad など） 46.6%
5位	ワーク（子ども向けの「ワーク」や「学習用ドリル」など） 31.7%	タブレット端末（iPad など） 21.5%	タブレット端末（iPad など） 27.3%	ビデオ・DVD・ハードディスクレコーダー 33.9%

※1 各国の上位５位までを表示。　※2 数値は、「週に３日以上」使用するの％。

4か国とも上位に入るのはテレビで、テレビは子どもにとって最も身近なメディアだと言うことができます。絵本は日本、中国、フィンランドでは上位ですが、インドネシアは他国と比べて絵本の所有率自体が低く、使用頻度も５位以内に入りませんでした。

日本に特徴的なのは、タブレット端末やスマートフォンといった新しい情報機器の使用頻度が５位以内に入らなかったことです。一方、中国、インドネシア、フィンランドでは、タブレット端末が５位以内に入りました。タブレット端末の使用頻度が４か国の中で最も高いフィンランドでは、就学前教育である「プリスクール（エシコウル）」のグループ活動で活用されることもあるようです。

今後、日本でもこれら情報機器の所有率や使用頻度が高まることが考えられるため、子どもにどのように与え、使わせるかを考えていくことが課題になりそうです。

各国別 幼児の母親の有職率・子育て意識

日本　母親の有職率 34.3％。子育てにおいては、自立、生活習慣、協調性を重視。他人に迷惑をかけないことを願う比率が高く、将来の社会を担うという意識が低い。

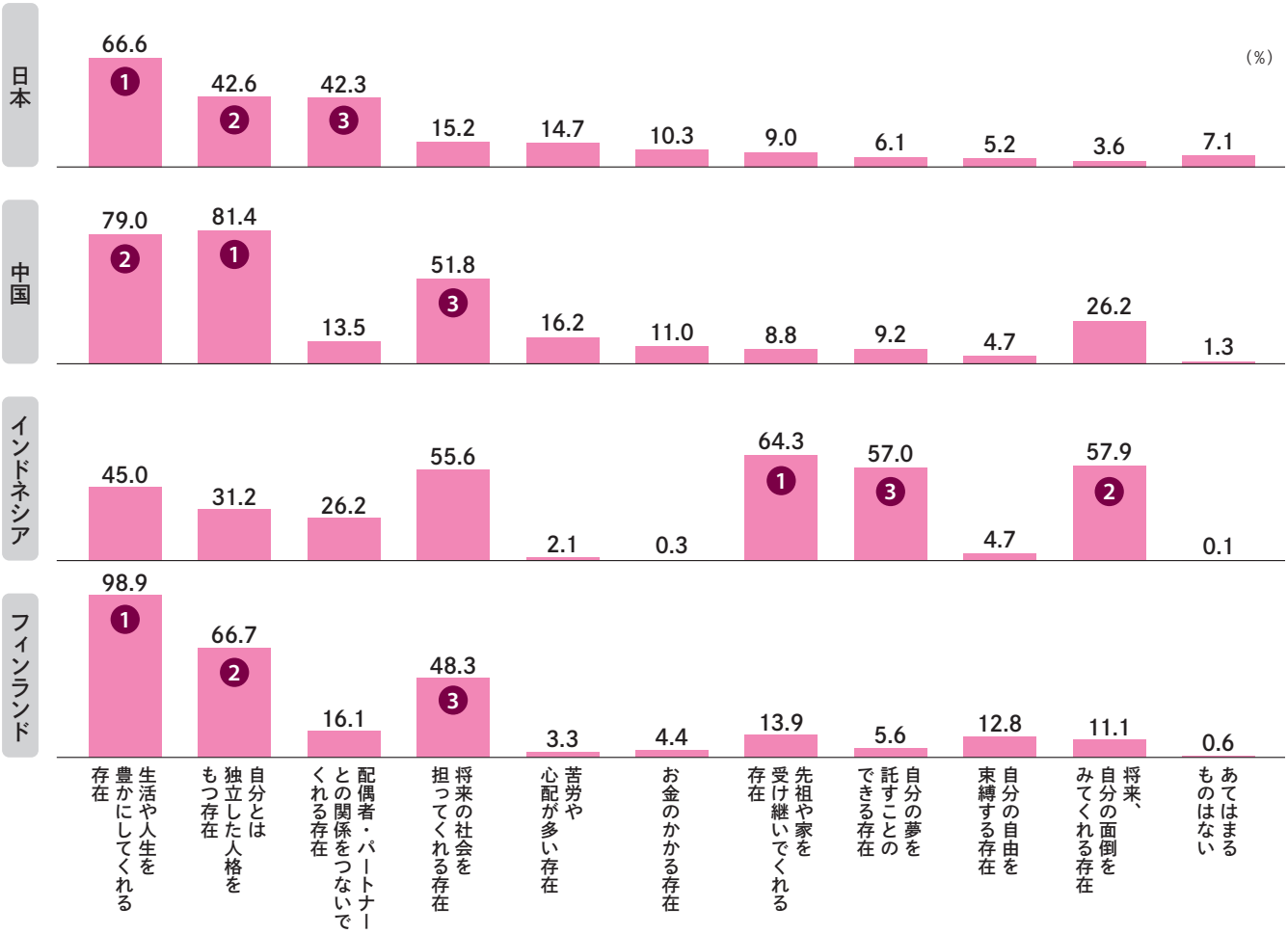
中国　母親の有職率 90.0％。子どもへの進学期待が４か国中最も高く、習い事に通う比率も最も高い。また、80％以上が子どもを自分とは独立した人格と捉えている。

インドネシア　母親の有職率 19.2％。イスラム教の影響を受ける。家族意識や家系継承意識が非常に強く、自分より子どもを優先する。子どもへの進学期待も高い。

フィンランド　母親の有職率 84.5％。80％以上が、子育てとともに自分の生き方も大切にしたいと考え、母親が常に一緒でなくても愛をもって育てればよいと考えている。

3 母親にとっての子どもという存在

各国とも、子どもは生活や人生を豊かにする存在
日本では、社会を担う存在という意識が低い



※1 複数回答。 ※2 日本の降順に表示。 ※3 各国の上位3位までの項目に①②③と表示。

4か国すべてで一定の比率を示したのは「生活や人生を豊かにしてくれる存在」でした。「苦労や心配が多い存在」「お金のかかる存在」といった否定的な項目はどの国も20%を下回り、子どもをポジティブな存在として捉えていることがうかがえます。

一方「将来の社会を担ってくれる存在」は、中国、インドネシア、フィンランドが50%前後であるのに対し、日本は15.2%でした。グラフには表していませんが、「子どもの将来に対する期待」に関する設問でも、日本は「社会のために尽くす人」という回答が3.5%と4か国で最も低いという結果が出ており、子どもを社会に貢献する存在として捉える意識が低いようです。

そのほか、上のグラフで特徴的なのは、インドネシアの回答傾向でしょう。「先祖や家を受け継いでくれる存在」「将来、自分の面倒をみてくれる存在」「自分の夢を託すことのできる存在」が他国よりも30ポイント以上高い数値となっています。インドネシアでは、家を守っていくための大切な存在として、子どもを捉えていることがわかります。

荒牧先生からメッセージ

私が身近に接する大学生も、就職活動の際に、自分の適性や能力を踏まえて職業選択を行うことは当たり前であっても、職業を通して、どのように社会に貢献できるかという視点をもつことは少ないようです。どちらかというと身の回りだけに向きがちな意識を社会に向かって開き、自分も役立つ人間になれるという気持ちを育むことが必要ではないでしょうか。

4 母親の教育・しつけに関する情報源

日本の母親の主たる情報源は 家族や友人・園の先生やインターネット

(%)

		日本	中国	インドネシア	フィンランド
家族	配偶者・パートナー	58.8	41.3	86.1	51.1
	あなたの親	46.0	23.1	54.4	41.7
	あなたのきょうだいや親戚	18.6	11.8	27.3	21.7
	配偶者・パートナーの親	16.6	9.6	27.6	11.1
	配偶者・パートナーのきょうだいや親戚	3.9	4.6	11.7	2.2
社会	あなたの友人・知人	52.1	52.2	33.0	63.9
	園の先生	39.8	57.5	49.7	52.2
	子どもの習い事や教室の先生	17.7	30.7	9.1	1.7
	子育てサークルの仲間（日本）／幼稚園などで知り合うママ友*1	7.7	57.2	4.1	8.9
	教育の専門家*2	-	20.2	-	-
	病院の医師や看護師	7.0	8.7	1.2	6.7
	保健師や栄養士	3.9	4.0	0.8	1.7
	市区町村の子育てサービス窓口の人	2.8	1.2	3.3	25.6
	配偶者・パートナーの友人・知人	1.8	8.4	6.0	1.7
メディア	インターネットやブログ	32.3	25.9	16.4	48.9
	テレビ・ラジオ	19.2	16.5	18.4	7.8
	育児・教育雑誌	15.1	23.9	3.2	13.3
	育児書や教育書などの書籍	10.9	43.3	3.0	15.6
	ソーシャルメディア（Facebook など）	8.4	58.8	6.4	12.8
	新聞	6.0	6.4	0.2	11.1
	その他	1.3	0.8	0.1	4.4
	特にない	8.5	0.9	0.2	8.3

幼稚園児の母親の場合 38.1%
保育園児の母親の場合 49.2%

※1 複数回答。
※2 網掛けは 50%以上の項目。
*1 各国の事情に応じて翻訳している。「育児を通して知り合った仲間（中国）」「子どもの学校などで知り合った仲間（インドネシア）」「地域の父親・母親仲間（フィンランド）」。
*2 中国のみの項目。

各国に違いが見られる中、「配偶者・パートナー」「あなたの友人・知人」「園の先生」は、各国とも比較的上位に入りました。日本の「園の先生」は39.8%で、他国と比べるとやや低くなりました。ただし、子どもの就園先別に見ると、保育園児の母親の「園の先生」は49.2%です。保育園では、送迎時の会話や連絡帳など、園と保護者とのコミュニケーション手段が多いことが関係するかもしれません。

国別に見ると、中国は「ソーシャルメディア」の比率が高く、「育児書や教育書などの書籍」の情報も低くありません。インドネシアは家族を頼る比率が高く、メディアから情報を得る比率は4か国で最も低くなりました。フィンランドは「ネウボラ」という未就学児までの公的な家族支援制度があるため、「市区町村の子育てサービス窓口の人」が他国より高い比率です。日本は主に周囲の人々や「インターネットやブログ」から情報を得ているようです。

日本でも今後、子育てにおける園の役割が高まっていくことを踏まえると、情報源としての園の先生方の重要性がますます高まりそうです。

荒牧先生からメッセージ

今後に向けた保護者とのコミュニケーションは、各園ともに非常に工夫のしがいがある課題でしょう。例えば、家庭では見えづらい「協調性」を園でどのように育んでいるか、園が積極的に伝えれば、保護者も子どもの成長を多角的に捉えられるようになります。園と保護者が互いを子育てのパートナーと考え、よいパスを出し合って、それぞれに見える子どもの姿を緊密にやり取りし合えるような関係を築いていけるとよいのではないでしょうか。